

救急撮影室について

検査シリーズ

当院の救急外来は救命救急センターを併設しており、一刻を争う重症度の高い患者さまなど、多くの方々が受診されます。救急撮影室は救急外来から依頼されるすべてのX線撮影を担当します。場所は救急外来のすぐ隣に位置し、昼夜を問わず迅速に対応できるようスタッフ一同心がけています。

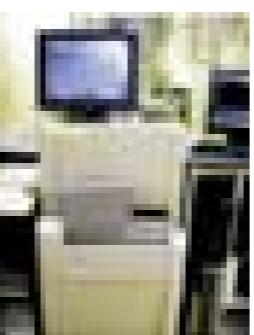


救急撮影の特徴

撮影する部位は胸部、腹部をはじめ身体全体が対象となります。が、痛みや発熱などから、一定の撮影体位がとれない患者さまも多く、迅速な対応が求められます。担当する技師は、補助具等を利用して、患者さまの負担はできるだけ少なく、安全に撮影できるよう常に心がけて業務に取り組んでいます。

X線撮影とは
体を通り抜けたX線の量の違いにより、肺は黒く、骨を白く現像して、フィルム出力したり、イメージングプレートなどの検出器を用いて判別できるようになります。そこで内部の様子を知る画像検査法の一種です。主に画像診断の第一段階として用いられています。

X線撮影とは



↑当院のCR装置
コニカ社製
BEGIUS MODEL 170

画像を見てみよう

実際に救急外来で撮影された
胸部X線撮影

1 胸部×線撮影

2 腹部×臓撮影

1 脳部×線撮影

基本は立った状態で撮影しますが、困難な患者ではなるか座ったままになります。必要に応じて撮影するところの広がりや詳細なられます。

基本は寝た状態と立った状態の2回、息をはいて撮影します。寝た状態で肝臓から骨盤までの全体像を観察し、立った状態で胃や腸管内にたまつたガス(空気)の広がり具合を見る」とことで腸に穴が開く病気(穿孔)せんこうや腸がふさがってしまう病気(腸閉塞)ちょうへいせきなどの診断ができます。

A posterior-anterior (PA) chest X-ray image. A large red circle highlights the right side of the heart and the surrounding pulmonary regions. A smaller red arrow points to a specific area within the circled region, likely indicating a point of interest or a finding such as a nodule or infiltrate.

解説
腹痛や下痢など腹部疾患が疑われる場合は腹部X線撮影を行います。腸閉塞が疑われ撮影された腹部立位X線写真です。流れが悪くなっていることが原因で腸の一部が拡張しています。(印参照)

X線被ばくについて

私たちも普通に生活しているだけで1年間に大気、大地、食物などから2.4ミリシーベルトの放射線を浴びています。X線撮影は、というと胸部で0.1、腹部で1.2ミリシーベルト程度です。自然界から受ける放射線量とあまり変わりません。また、X線撮影は、患者さ

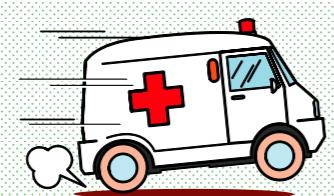
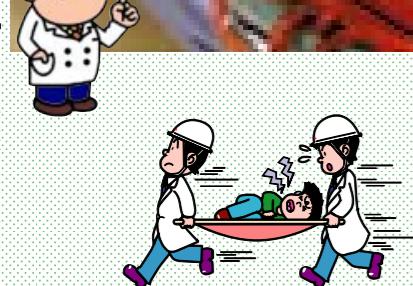


5 バックボード固定
交通事故などで全身を撲している可能性のある者さまは、動くことによて病態が悪化する可能性があります。動いても大丈

5 バックボード固定
交通事故などで全身を打撲している可能性のある患者さまは、動くことによつて病態が悪化する可能性があります。動いても大丈夫と診断されるまでは、固定具(バックボード)で全身を保護した状態で、各部位のX線撮影や移動などを行います。

4 ポータブル×線撮影

4 ポータブルX線撮影
移動型のX線撮影装置（ポータブル）は、重症度が高く救急撮影室までの移動が困難な患者さまに対して使用します。小回りがきくので患者さまのベッドサイドまで行くことができます。



転倒や転落でうでや足の骨を強打したりひねった際にX線撮影を行います。手首とひじの間（前腕部）が腫れており変形し骨折が疑われ撮影されたり前腕部X線写真です。前腕骨が2本とも折っています。（矢印参照）

【文責 診療放射線技術科】